

---

# 琵琶法師

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

琵琶法師

### 【Nコード】

N0450E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

鎌倉時代の大和。ある法師が宮参りの帰りに立ち寄った家に入るとそこには土蜘蛛がいて。古典から題材を取ったジャパニーズホラーです。

## 第一章

### 琵琶法師

鎌倉時代の中頃、国はおそらく和泉が大和、その辺りの話である。ある法師が宮参りの帰りにとある家の前を通った。彼はその家を見てまずは怪訝に思った。

「何故かな、これは」

見れば扉が開かれたままだ。しかも中からは呻き声が聞こえる。只事ではないことをすぐに感じ取った彼はその手に持っている杖と己の御仏に仕える心を頼りに家の中に入ったのであった。

家の中は外から見ただよりも広いものであった。だが彼が驚いたのはその思ったより広い家の中に対してではなかった。

何と家の中にいたのはあまりにも大きな蜘蛛であったのだ。しかも土蜘蛛であった。その土蜘蛛が糸を放ち若い男を捕らえていたのだ。

「これは……何とっ」

法師はそれを見てまずは肝を潰した。土蜘蛛というものがいてそれが人を喰らうということは聞いていたが見るのははじめてであったからだ。

それで肝を潰したのだがだからといって放っておくわけにもいかなかった。その彼に捕らえられている若い男も気付いたのであった。

「あの、お坊様」

彼に対して慌てて声をかけてきた。

「助けて下さい、このままじゃ私は」

「わかっております」

法師もそれに応えた。そうしてその手に持っている錫杖を両手に持ち替える。それから思いきり振りかざしながら念仏を唱えつつ土蜘蛛に殴り掛かるのであった。

「妖かしよ。退くがいい！」

そう叫びつつ殴り掛かる。それが蜘蛛の頭に当たると土蜘蛛は慌てて逃げ出し何処かへと消えてしまった。何とか難は逃れたようであつた。

法師は土蜘蛛が消えたのを見てとりあえずは若い男の糸を取つた。男はここでようやく安心した顔になつた。それから法師に問うてきたのであつた。

「旅の方でしょうか」

「はい、そうです」

法師は素直にそう答えた。

「扉が開いていたのでおかしいと思ひ立ち寄つたのですが」

「そうだったのですか。いや、助かりました」

男はあらためて礼を述べた。

「もう少しで食われてしまうところでした」

「そうですね。しかしまた何故土蜘蛛がこのようなところに」

普通土蜘蛛といえは山の中にいるものだ。それがどうして民家までいるのかと不思議に思つたのだ。男は法師の問いに対してまずは一呼吸置いてから述べてきた。

「それですがまずは」

「はい」

「旅の方ですよね」

またそれを問うてきたのであつた。

「確か」

「そうですが。それが何か」

「ならば丁度いいです。食事を御一緒にどうですか？」

彼はこう提案してきたのであつた。

「丁度用意もできていますし。宜しければ」

「よいのですか、それで」

「はい、助けて頂いた恩もあります」

今度は彼は穏やかな顔で微笑んで言つてきた。

「何もありませんがせめてそれで」

「わかりました。それでは頂きます」

「ではそのように」

こうして男と法師は共に男の家の中で食事を探ることになった。炉端を囲んで雑穀の中に野菜を色々と入れた雑炊を食べていた。この時代は米はそうそう食べられるものではなかったのである。食べるといつても大抵は玄米であつた。庶民はもっぱら雑穀を食べていた。その雑穀の雑炊を食べつつその中でまた話をするのであつた。

「実はですね」

「ええ」

その雑炊を食べながら男が話をしてきた。

「最初はごく普通の琵琶法師が来たのです」

「琵琶法師がですか」

「ええ。それが実に変わった法師でした」

そう法師に対して説明する。

## 第二章

「普通琵琶法師といえば平家物語を語りますね」

「それが一番多いですね」

平家物語は琵琶法師達によつて広められたといつて過言ではないものである。その盛衰を語るのが多くの人の心を打つたのである。

「ところがその法師が申し出て来たのは源頼攻が土蜘蛛を倒す話です」

「ほほう、蜘蛛をですか」

法師にとつてもそれは珍しい話であつた。その話は知っているがそれを琵琶法師が語るといふのは聞いたことのないことであつたのだ。

「それは確かに珍しいですね」

「それで聞きたいと思ひ聞いていたのですが話を聞いているうちに」

「どうなつたのですか？」

「法師の姿が見る見るうちに変わつていきまして」

そう語る男の顔もまた見る見るうちに変わつていつていた。ただし彼は青くなつていだけであつた。それは彼が人であるということであつた。

「忽ち巨大な蜘蛛になつてしまつたのでございます。私は腰が抜けて逃げることもできずに」

「それで捕らえられたのですか」

「はい。土蜘蛛が倒されるその場面になると糸を放つてきまして語るその顔がさらに青いものになる。

「捕らえられ。もう少して食べられてしまつところでした」

「危ないところだつたのですね」

「ですが。助かりました」

男はここまで話したところで法師に対して礼を述べた。

「これも貴方のおかげです」

「いえ、私の力ではありません」

だが法師はそれは否定するのであった。

「貴方のものではないと」

「そうです。私がここに入ったのは偶然です」

そうしてこう述べた。

「いふならばこれは」

「御仏の加護でしょうか」

「その通りです。しかしそれにしても」

法師はここまで話したうえであらためて思うのであった。

「まさか土蜘蛛がここに出るとは」

「世の中というものは本当に何が起こるかわかりませんな」

「全くです」

法師は男の言葉に頷くのであった。

「そしてです」

「はい」

話はさらに続く。

「妖しい存在というものは自分からもやって来る」

「それも何時出るかわからないものですね」

そう二人で話すのであった。以後土蜘蛛のことを話す琵琶法師が出たという話はない。しかしそれは話に出ないだけかも知れない。

若しかしたらいたのかも知れない。しかしそれを確かなものにする話もない。世に出る話というものも少なく真相はわからないものなのだ。結局のところはそうとしか言えないのもまた世の中なのであるうか。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0450e/>

---

琵琶法師

2008年11月7日06時38分発行